礼拝　　２０２１年9月１２日（日）
題　　『派遣された者たち』
テキスト：マルコ６：６b～１３節

皆さん、おはようございます。
先日の新聞の記事に心が止まりました。最初にご紹介します。「母との散歩　宝石のような時間」との題で、兵庫県在住　大学生 18 歳の樋口　和葉さんの投稿です。　「コロナ禍で多くのことが出来なくなった。しかし私は、大切なものをひとつ得ることができた。母と一緒に散歩する時間だ。公園などを歩き、街路樹や道端の花に目を向け、木の実を拾い、たわいもない話をする。コロナ以前に、こんな時間を持つことはなかった。散歩しながらだと、これまで口にしづらかったことも気軽に話せる気がする。アルバイト先での立ち振る舞いなど、私なりの悩みを相談したり、母からは私が幼かった頃の育児苦労相談を聞いたり。野に咲く花の名前もずいぶん覚えた。すべてが私にとっていとおしく、宝石のような時間だ。いつになれば以前のような生活に戻れるのか、今はめども立たない。しかし、こんな時だからこそ気づけた身近なものの大切さを、いつかコロナ禍が収まった後も忘れにようにしたいと思う。」以上です。

コロナ禍でストレスも溜まりやすくなりますが、その中にも神さまが備えてくださった良い時間もあることを思いながら過ごしたいと思わされました。
さて、今日の聖書の個所は、イエスが 12 人の弟子たちを神さまの言葉と愛の業を行うためにガリラヤの村々に派遣、遣わされた個所です。
弟子たちは宣教の旅に出かけたのです。
昔、ドイツ人の宣教師の方に聞いたことですが、ドイツでは子どもを教育する最終段階で、旅をさせるということです。やはり旅によって学ぶことが多くあるのだと思います。日本のことわざにも「可愛い子には　旅をさせよ」とあります。
◆十二人を派遣する
:それから、イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった。
7:そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。
その際、汚れた霊に対する権能を授け、
イエスは選ばれた 12 人の弟子たちを旅に出したのです。
「二人ずづ組にして」という言葉に目がとまりました。
これは、約２０００前当時の、旅の習慣でもあったようです。
二人であえば何より話し合うことができます。最初にお話ししました旅で

はありませんが「母との散歩」の心温まる投稿を思います。
困難な時に助け合うこともできます。
共に祈り合えるということも大きなことです。また事が起こった時に、互いに証人になることもできます。宣教・伝道には「話し合える、助け合える、祈り合える」関係が大切なのです。
「汚れた霊に対する権能を授け、」とは、今日的に言えば、間違った考えを正し、人の心を癒す働きに参加する力であるようにも思えます。

旅に出かける前のイエスの弟子たちの覚悟、心構えが語られています。
8:旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も
持たず、ここの個所はマタイ１０章にもルカ９章にも記されていますので読み比べると更に学べると思います。
「杖一本」とは、でこぼこ道を歩くことを助ける杖。野獣や強盗から身を守る杖。それ以外はパンも、袋も、また帯の中に金も持たず、とは、ともかく神により頼むようにとの忠告です。マタイによる福音書 6 章 33 節、34 節のイエスのことばを思います。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」と。
9:ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命
じられた。とあります。「履物は履くように、」と。旅を続けるには、足が必要。その足を守るためでしょうか。ちなみに、「履物」ということばは、新約聖書の原語ギリリア語ではサンダリアで、サンダルのことです。下着を二枚着る必要はないということでしょうか。パンは留まった家で与えられるにしても、袋を持って何かもらうことを期待せず、また帯の中に金も持っていかないようにと。
　そして、
10:また、こうも言われた。「どこでも、ある家に入ったら、その土地
から旅立つときまで、その家にとどまりなさい。住む場所と食事の提供は感謝して受けるようにとのことでもあります。受け入れてもらったら人々の好意を受けることの勧めとも思えます。人の優しさを大切にすること。しかし、もっと居心地の良い所を求めるようなことはしないこと。弟子たちを迎え入れてくれた家に留まるようにと。あっちこっちとふらつかないようにとの忠告です。しかし、主イエスは、また
11:しかし、あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようと

しない所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの証しとして足の裏の埃を払い落としなさい。」とも弟子たちに忠告しています。
現実には、拒絶されることも珍しくなかったことなのかもしれません。
そこを出ていくとき、彼らへの証しとして「足の裏の埃を払い落としなさい。」これは潔く縁を切ること絶縁を意味していると言われます。
このイエスからの送り出しの言葉を胸に秘めて弟子たちはいよいよ宣教の旅に出かけることになったのです。わたしたちも神とイエスに招かれて信仰生活の旅を続けています。

12:十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。「悔い改める」とはギリシア語でメタノイアと言われることばです。顔を神に向ける、つまり心を神さまに向けて生きる生き方です。そのような人たちが与えられるように、弟子たちは祈りながら村々をイエスの福音を携えてまわったのです。
弟子たちの働きには、見える結果が伴ったのです。つまり、
13:そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。
弟子たちと出会う人たちは、イエスに出会うこととなり、
考え方も正され、心を癒され、病人も癒されて行ったのです。「油を塗って」とは、オリーブ油だと思われますが、体をいやす働きでもあったのです。
明治の初期には、諸外国から日本にも宣教師が多くやって来ました。医者である宣教師の方々もやって来て、日本各地の医療に貢献しました。また教育福祉に関してもキリスト者たちの果たした働きは実に大きかったのです。明治期に淡路島の伝道にも尽力された河辺貞吉牧師の祈りと情熱にも心動かされます。
　しかし、多くの日本人は、医療、教育、福祉の恩恵にはあずかりましたが、イエスと神を受け入れる人たちは多くはなかったように思えます。
聖書でも、イエスさまの働きは、身体と心の癒しに関しては人々は喜んで受け入れましたが、それを求めるだけで終わることも多かったようです。癒されると離れて行く人も多いのです。
マルコによる福音書を読み進めると、徐々に主イエスは、奇跡や病人の癒しを行われことは少なくなって行きます。自ら十字架が近づいて来ていることを知っておられたからです。主イエスは、人間の究極の救いとして、自らを十字架へと揚げることによって、人間の根本から罪の赦しを与え、解放し救おうとされ、それを実現されたのです。イエスの十字架によって神の救いは完成したのです。イエスに従う人たちもいるのです。
　イエスの十字架を受け入れる者は、たとえ貧しくとも、病気の中でも心安

らかに天に召されるまで感謝して、この困難の多い地上を精一杯行き抜くことができるようにしてくださったのです。愛の主が共にいてくださるとの確信を持って生きて行くのです。イエスにあって、神に用いられて行くのです。わたしたちも、コロナ禍でも主イエスの愛と救いの恵みに与っていることを感謝し、信仰・希望・愛の実りを出会う人たちと共に分かち合って行きたいと願います。主の恵みを味わいつつ、周りに伝えて行きたいと願います。

◆十二人を派遣する

:それから、イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった。
7:そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。
その際、汚れた霊に対する権能を授け、
8:旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も
持たず、
9:ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命
じられた。
10:また、こうも言われた。「どこでも、ある家に入ったら、その土地
から旅立つときまで、その家にとどまりなさい。
11:しかし、あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようとも
しない所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの証しとして足
の裏の埃を払い落としなさい。」
12:十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。
13:そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。